

## 田んぼのオーナー稲刈り体験



10月6日、幌内地区のほ場で町観光協会主催による「田んぼのオーナー稲刈り体験」が行われ、過去最多となる50組270人が、すがすがしい秋晴れの下で稲刈りを体験しました。

参加者は田んぼに入り稲刈り鎌を使って約95アール分を1時間ほどかけて収穫。参加者の中には同日にこぶしの湯あつま前広場で開催された「あつまルシェ」の会場で、展示していた足踏み脱穀機や唐箕などの昔の農機具を使い、刈り取ったばかりの稲を脱穀する参加者もいました。

なお、刈り取った稲は11月中旬にオーナーの手に渡ります。

## 町教育委員の伴俊行さん（新町）に感謝状

平成23年10月から2期8年にわたって町教育委員として町の教育行政や文化スポーツ振興に尽力された伴俊行さん（新町・69歳）に、10月2日、役場で宮坂町長から感謝状が贈呈されました。伴さんは「教育行政の仕組みや、新しい教育の取り組みなど、さまざまな経験の機会をいただき感謝しています。これからもスポーツ振興などに携わっていきたいです」と笑顔で話していました。



## 「平成30年北海道胆振東部地震を振り返り、今後の減災・復興を考える」シンポジウムを開催



土砂移動の特徴などを話す山田センター長



10月27日、北海道大学広域複合災害研究センター（山田孝センター長）と厚真町の共催による「平成30年北海道胆振東部地震を振り返り、今後の減災・復興を考える」シンポジウムが総合福祉センターで開催され、町内外から約80人が参加しました。

このシンポジウムは、農学や理学、工学などさまざまな分野の研究者が連携して災害予測や対策について研究している同センターの活動や成果を活用し、今後の復旧・復興を考えることを目的に実施。

宮坂町長の基調講演の後、北海道大学大学院農学研究院で教授を務める山田センター長ら、同センターに所属する研究者5人が現地調査や過去のデータからの分析結果を踏まえて、北海道胆振東部地震は斜面崩壊が全国的に適用されている危険区域設定基準に合わない特殊な条件下で起こったことを説明しました。また、地震のメカニズム、地震に対する防災についても話しました。

併せて行われた現地見学会では日高幌内川や東和地区などの被災箇所では北海道胆振東部地震の特徴や今後の課題について関係機関や研究者から解説があり、約30人の参加者はそれぞれ質問やメモを取るなど、高い関心を寄せていました。

## NPO法人コメリ災害対策センターと物資供給協定締結



宮坂町長と出席した二宮北海道ゾーンマネージャー（右）

10月2日、総合福祉センターでホームセンターを全国展開する株式会社コメリの災害対策組織NPO法人コメリ災害対策センター（捧雄一郎理事長）と町が「災害時における物資供給に関する協定」の締結式が行われました。

この協定は、平常時は相互の連携体制や物資の供給などについての情報交換、防災訓練などでの住民の防災意識啓発などで協力し、災害時は飲料水や生活必需品の供給など、町が必要と判断した物資の供給、運搬を同センターに要請するものです。

式に出席した同センター二宮貴茂北海道ゾーンマネージャーは「これまでの経験を生かして迅速かつ円滑に対応していきたいです」と話していました。

## 多くの応援と協力に感謝して第19回厚真中学校定期演奏会を開催

10月13日、厚真中学校吹奏楽部の定期演奏会が総合福祉センターで開催されました。この演奏会は例年は中学校体育館で開催されていましたが、より多くの地域の方に聴いていただく今年度は総合福祉センターで開催。

1部と2部はバッハの「主よ人の望みの喜びを」などのクラシックの名曲やZARDの「負けないで」など昭和、平成に流行した歌謡曲で会場を盛り上げました。3部では厚真町民吹奏楽団や卒業生をはじめとした吹奏楽部とゆかりのある方々との総勢40人による共演で「アラジンメドレー」などを披露。アンコールも含め全12曲を演奏し来場した約150人の観客を沸かせました。



## 若者の力をまちづくりに生かす旭川大学・旭川大学短期大学と包括連携協定締結



協定書を持つ宮坂町長と山内学長（右）

町と旭川大学・旭川大学短期大学（山内亮史学長）が10月8日、総合福祉センターで包括連携協定式を行い、宮坂町長と山内学長が協定書に署名しました。

町と同大学はこれまで、町を拠点としたコミュニティ調査実習やインターンシップ（職業体験）の受け入れのほか、昨年の地震の際には学生がボランティアや餅つき大会を行うなどの交流を重ねてきました。今回の協定の締結に伴い、交流をよりいっそう深め、地域コミュニティの活性化、人材育成や講師の派遣など幅広い分野での協力を図っていきます。宮坂町長は「旭川大学の持つ教育力と学生のエネルギーを発揮し、厚真町に元気を分けていただきたいと思います」と述べ、山内学長は「町に寄り添い、少しでも復興へのまちづくりに協力できればと思います」と話していました。